

九州大学韓国学研究者紹介：マシュー・オーガスティン准教授

オーガスティン, マシュー
九州大学大学院比較社会文化研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/2004824>

出版情報：韓国研究センター年報. 18, pp.7-10, 2018-03-31. Research Center for Korean Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



マシュー・オーガスティン 准教授

プロフィール

大学院比較社会文化研究院准教授、大学院地球社会統合科学府准教授。

博士(歴史学)。専門は、日本・東アジア近現代史。担当科目「近現代日本と東アジア関係史研究」、「Modern Japan in East Asian History」、「現代史」、「韓国・朝鮮研究の最前線」など。主要論文、著作 “The Limits of Decolonization: American Occupiers and the ‘Korean Problem,’ 1945-1948” (2017) “The Rise of American Hegemony in Northeast Asia: An International History of Military Occupations and Alliances, 1945-1954” (2015) など

専門について

富樫：先生は日本で育ちになったとお聞きしましたが、先生のご経歴をお聞かせくださいませんか。

オーガスティン：京都で生まれ育ち、小学校まで日本の教育制度で学び、中学校から高等学校までは神戸のインターナショナルスクールへ通いました。その間、アメリカとベルギーにも一年ずつ住みましたが、その後再びアメリカへ行って大学、大学院を修了しました。

富樫：今携わられている研究には学部からご関心がおありでしたか。

オーガスティン：学部はプリンストン大学だったのですが、その時は政治学を専攻していました。歴史学へ変更したのはコロンビア大学院の時です。学部では日米同盟をはじめ、北東アジアにおけるアメリカの防衛協力体制について研究をしました。その後、大学院へ進学し、第二次世界大戦後の日米関係について詳細な研究をするのであれば、占領期の歴史に専念すればよいのではないかとアド

バイスを受けました。

富樫：先生のご出身であるコロンビア大学院ではどのような研究をされていたのですか。

オーガスティン：ちょうど大学院に進むときにジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』という本が出版されまして、大きな刺激を受けました。この本をひとつのきっかけとして、戦後占領下の日本のみならず、同時期にアメリカの軍政下におかれた南朝鮮に関心が向くようになりました。修士では、アメリカによる東アジア占領を日本と南朝鮮で比較すること、とくに両国における憲法の制定過程を中心に研究しました。その後、博士課程では、戦後東アジアにおける民族の大移動と呼ばれる多くの人々の引揚げや帰還などが新たに形成されつつあった地域秩序にどう影響されたのかなどについて研究しました。

富樫：もう少し詳しくお伺いしてもいいでしょうか。

オーガスティン：そうですね、大日本帝国の崩壊とともにいわゆる「帰国ラッシュ」という現象が起きた一方で、いわゆる「密航」というかたちで多くの人々が越境しましたが、そうした人流がアメリ



カの占領地として生まれた新しい地域秩序にどう影響され、また逆に各地の国境管理体制の形成にどう影響を与えたのかとい

うことを中心に研究してきました。

富樫：歴史学のアプローチを使いながらも研究対象としては政治学に近い部分を研究されているのでしょうか。

オーガスティン：政治学と言うよりは政治史と社会史の両方ですね。アメリカ政府の東アジア政策や対日占領政策も分析してきておりますが、同時に、それに影響された人々の移動や経験も含まれるという意味では社会史の側面もあると思います。また、そのような両側面を意識しながら研究を進めています。

富樫：先生は高校まで日本で育ちになったご経験がありますが、韓国へ関心を持たれたきっかけについてお伺いできますか。

オーガスティン：生まれ育った京都の近所に在日朝鮮人のコミュニティがありました。子供の時から一緒に遊んでいました。また、インターナショナルスクールでも在日韓国人の学生と一緒に学んでいました。このような経験の中で、頭の片隅で、やはり日本人とはどこか違うんだなということに関心を持っていたのかもしれない。大学に進学した当初の第二外国語は中国語で三年間勉強しました。夏のプログラムで北京に留学したこともあります。その後、卒業する前に北東アジアの三大言語を身に付けてみたいという欲望もあり、途中から韓国語に変わったという経緯があります。変わったというのは、大学院でも韓国と日本を視野に入れた研究をしたいと考えるようになっていたという背景があったからだと思います。学部を卒

業してから半年ほど、大田で英語の教師をしました。その後一年間、慶南大学の極東問題研究所で、『Asian Perspective』というジャーナルの英語編集を担当しました。韓国滞在期間に引き続き韓国語を勉強しました。

富樫：大学院を修了された後にはどのような経緯で九州へいらっしゃいましたか。

オーガスティン：実は、プリンストン時代、もう20年前になりますが、九州大学のJTWプログラムを利用して1年間交換留学で来ました。日本の大学で学ぶのは初めてでしたし、とても有意義な1年でした。その時に松原孝俊先生から初めて韓国語を学びました。博士課程在学中には、東京大学で2年間研究しました。博士号取得後、スタンフォード大学にて1年間ポスドクを経験し、世界を視野に入れて就職活動をしたわけですが、2010年10月に九州大学に参ることになりました。

アジアと九州大学

富樫：九州大学の地の利はアジアに近いというところがあると思います。九州大学で東アジア、韓国関連のご研究をされている先生から見て九州大学の強みはどこにあると思われますか。

オーガスティン：韓国関連の研究をしている者としては、九州大学にはいろんな分野で韓国関連の研究者が活躍しているという印象があります。先ほど話しましたように、九州大学で韓国語を学んだことは私にとって大変いい経験でしたし、その後延世大学の語学堂へ留学するきっかけともなりました。語学の教育が充実しているということと、韓国研究センターの設立は画期的なことであったように思います。

富樫：日韓関係の政治的な悪化が叫ばれていますが、九州大学では「近現代日本と東アジア関係史研究」といった科目を授業する中で何か感じら

れることはありますか。

オーガスティン：日韓であれ日中であれ、両国の目線から身をもって学ぶということに重要な意味があると思います。例えば「歴史認識問題」というと対立する感情が交わってしまうこともあるので、回避的になりがちかも知れませんが、それを逆に対話の機会として捉えることができる筈だと信じております。つまり、授業そして教室という空間は建設的に話をするのできる貴重な場であると思っています。相手の意見を尊重しながら自分の意見も語れるような対話の実現したとき、とても刺激されますね。学生もやはり日韓間の難しい問題について最初は重く構えるのですが、相互理解の重要性を感じ取ると心を開けてくれます。学生の声の聴くということはとても勉強になります。

韓国研究センターが果たす役割とは…

富樫：九州大学は国際化を進めていますが、その中で韓国研究センターに望むことは何でしょうか。

オーガスティン：フロンティア科目という基幹教育科目授業に「韓国・朝鮮学の最前線」が開講されていますが、先日、欧米におけるコリアンスタディーズというテーマで講義をする機会がありました。欧米のコリアンスタディーズ、例えばコロンビア大学のプログラムについては、実際その場で学び研究した経験がありましたので、自分にとっては身近なテーマです。ですが、講義の準備を進める中で今回改めて感じたのは、アメリカだけではなくヨーロッパでもコリアンスタディーズが普及しているということでした。それを踏まえて考えますと、九州大学の韓国研究センターが欧米のコリアンスタディーズを進めるセンターともしっかり連携を進めてほしいと思います。

富樫：欧米圏の研究所との連携もこれから必要になってくる部分ではあるのかもしれない。

オーガスティン：日本は韓国学研究の長い歴史がありますが、最近ではコリアンスタディーズの分野でも英語の出版物や研究書、雑誌などが増えてきています。欧米圏の各研究所はそれぞれ特色がありますが、コリアンスタディーズという意味では、政治・歴史・社会学など多分野において研究が盛んに行われています。例えば、最近コロンビア大学では、韓国文学や映像学を専門とされている先生が着任されています。私が学部生の頃は、プリンストン大学にコリアンスタディーズプログラムがありませんでしたが、今は専門のプログラムと共に先生もいらっしゃいます。また、それぞれの研究所が英語圏での研究成果を発信しています。欧米の研究所と日本の韓国学研究所が相互に連携し、総合的に研究を進める必要があるのではないかと思います。

富樫：そうですね。韓国研究センターは、史学にフォーカスを当てて研究を進めています。韓国前近代史若手研究者セミナーは今年で二回目を迎えました。また、大学演習林に関する研究も進めています。アジアとの関係という枠組みでは韓国研究センターはどのような役割を果たしていくべきでしょうか。

オーガスティン：個人的にとっても期待しているのは森田芳夫文庫の公開です。私の博士論文でも森田芳夫先生の終戦後の朝鮮に関する記録や在日朝鮮人の処遇についての著書を参考にしてきました。それに関連する、もしくはそのベースとなっ



た資料があるならば直接じっくり見てみたいと思っています。森田芳夫文庫については、私が九州大学に赴任してからも韓国をはじめ、海外から閲覧のリクエストが来ています。史料がきちんと整理され、そして公開され、研究者が利用できる環境となれば、そのために九州大学を訪問する研究員や研究グループが増えると思います。

富樫：そうですね。資料のアーカイブ機関としての役割も期待されているところですよ。

オーガスティン：資料が公開されるとアジアだけではなく、欧米の研究機関からも史料調査のために九州大学を訪れたり、国際シンポジウムなどを行う可能性も広がってくると思います。とても期待しています。

今後のご研究について

富樫：最後ですが、現在、そしてこれから予定されている先生のご研究についてお伺いしてもよろしいでしょうか。

オーガスティン：これまで研究対象としていた時期と重なるのですが、第二次世界大戦後東アジアにおける「脱植民地化」の歴史についての研究をはじめています。英語では「decolonization」と言いますが、これを中心的なテーマとするグローバルヒストリーの研究が欧米では進められています。そのなかで、東アジア地域についての研究、特に北東アジアについてはまさに今はじまったところです。具体的には朝鮮半島と台湾の脱植民地化の過程とその歴史、そしてそれが東アジアの国際関係をめぐりどのような意味を持つのか等について議論されています。私自身、朝鮮半島についてはこれまで取り組んできた研究との継続性がありますが、同時に台湾の歴史についても研究しています。去年は1年間台湾で研究をしておりました。

富樫：ポストコロニアリズムと東アジアという研

究は進められていると思うのですが、どのように異なるのでしょうか。

オーガスティン：「脱植民地化」はポストコロニアリズム研究が前提としている「ポスト」になるまでの過程として取り扱います。歴史そのものを探求するわけです。重要なテーマとしては人々の移動やそれに伴う私有財産や公的資産の処理、また旧植民地の法的地位の問題などがあると思います。例えば、韓国の場合、1948年に国籍法が制定されるまで「韓国人」(朝鮮人)はどのような法的地位にあったのかというような研究が進んでいません。占領軍はどのように関わっていたのか、または国際法上、韓国に住む人々はどのような地位にあったのか、といった問題などは研究が必要であると思います。降伏、解放、独立をした地域において、人々が実際直面した問題にフォーカスを当てて研究することによって、脱植民地化の歴史についての理解が深まると思います。

富樫：これからのご研究は、より韓国や台湾に重点を向けられるということでしょうか。

オーガスティン：もちろん日本も含まれます。私は従来の国家や国境の範囲を超えた研究を目指すために、トランスナショナルだけではなく地域を超えるという意味での「trans-regional」を強調してきています。東京大学の川島真先生は「脱帝国化」ということを仰っていますが、「脱植民地化」と「脱帝国化」の歴史的過程は密接に関わっています。旧宗主国としての日本から旧植民地がどう切り離され、そのことによって両地域で生活していた人々はどうなったのかということを知りたいと思います。

富樫：これからのご研究がますます楽しみです。本日は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。

インタビュー日：2017年11月22日

場所：伊都キャンパス 比言文教育研究棟517号室